

九月九日 赤飯 御菜 御菓子八種

已上小預給料米備進之

〔三議一統大雙紙〕一赤飯といふは、あづきの添たるを云也、白きは強飯也、右に箸を持、左手にて可喰、汁と菜とばかり箸にて挟み可喰なり、

〔禮容筆粹七〕がうはんせきはんの事

がうはんとは、俗に云しらむしの事也、はしを取、右の手の指三ツにてはし持ながら喰也、燒鹽などあらば、箸にてくふべし、せきはんとは、小豆の入たる故に赤色なるを以て名付たり、喰様右に同じ、

〔故實聞書條々四〕精進肴拵之卷

一赤飯召遣候事は勿論候、犬笠懸等の時も用候、座敷などへは不出候、河原の者などには必々給させ候、是白き強飯の事也、

一赤飯は祝儀の時も用候、本々はつくね候て用候、鳥の子など、俗に申し候、

一強飯の事狩又普請以下にも用候、是は常の儀ニ候、祝儀の時召遣候は、何をも不入候、又只の時は大豆など入候がよく候、大折に入候て、常に召遣候、

〔故實條々中〕一三月三日は赤飯なり、桃の花を酒に入候なり、略下

〔尺素往來〕菊花邊赤飯者、九日之興味、略中 皆是一時一會之景物、當日當座之賞翫候之間、令略之候、

〔酒食論〕飯室律師好飯申様

桃李のえむのあか飯は、花の色もやうつるらん、

〔梵舜日記〕慶長四年九月六日、幽齋ヨリ袖一端來、宗齋粟、白米、喜介女房ヨリ饅頭、赤飯來、源五兵衛栗持來、